

食道良性疾患と日本胸部外科学会

千葉大学第2外科教授
佐藤 博

この度、日本胸部外科学会30周年にあたり、食道良性疾患の過去、現在、未来について、何か書いて欲しい、という事で、まず、日本胸部外科学会と食道良性疾患が、どの様に歩んできたかを考察してみよう。日本胸部外科学会で、食道の良性疾患に関する発表演題は、第1回から第29回迄、その総数は97題である。初め、本学会が肺結核の外科的治療を主流として発足した様であり、食道関係の発表は少なく、その中で、食道良性疾患に関する発表演題は更に少ない。

これを細かく眺めてみると、第1回(昭23)には、縦隔洞ヘルニアの発表があったが、2、3、4回では一題の発表もなかった。第8回(昭30)に、噴門部手術後の逆流性食道炎の発表があり、その後、噴門切除、胃全摘後の逆流性食道炎に関する発表が、たびたびみられる様になった。第9回(昭31)から食道静脈瘤の手術の検討の発表があり、食道静脈瘤の問題も、その後、しばしば本学会で取り上げられている。第10回(昭32)には腐蝕性食道狭窄と、先天性食道狭窄の外科的治療が千葉大中山外科から発表された。腐蝕性食道狭窄はその後時折本学会に顔をだしている。第16回(昭38)に新生児の食道閉鎖症の治験例が阪大植田氏より発表され、この頃から日本小児外科学会の発足があり、この疾患はその後度々、本学会で、又小児外科学会で討議されている。その他、食道憩室、食道裂孔ヘルニア等の発表があったが、毎年1題から4題位までの発表で、本学会としてはこの方面の問題はあまり大きくは取り扱われていなかったというのが実状である。

しかし、第29回(昭50)では、本学会の主題として、食道良性狭窄がとりあげられ、その内容は、今迄本学会で発表されてきた良性疾患の殆んどが発表され、本学会における食道疾患の位置付けも、大分高くなったような感じがした。

先に、本学会における食道良性疾患の発表演題数は97題と述べたが、このうち37題、約40%は食道アカラシアに関するものである。第9回(昭31)に、食道アカラシアに合併した食道癌の3例が千葉大加藤氏から発表され第10回(昭32)食道アカラシアの外科的治療が同じく、千葉大加藤氏から発表があり、その後、毎年この疾患が本学会で新発見の報告があり、殊に、第19回(昭41)には、小生の司会で、本症のシンポジウムが行なわれている。本学会において、食道良性疾患としては食道アカラシアがその問題点を一番大きく取り上げられているといっても過言ではあるまい。この事は第23回(昭45)にも食道の機能性疾患という主題で、福島大本多氏の司会のもとにシンポジウムに取り上げられ、更に第28回(昭50)食道の良性疾患ということで、東北大葛西氏司会でシンポジウムが行なわれており、学問的に、臨床的に、飛躍的な発展をみたのである。

この様に、食道良性疾患の本学会での発表演題からみると、まず第1に食道アカラシアが、ついで、先天性或いは腐蝕性の食道狭窄、更に食道静脈瘤に関する諸問題が、そして食道憩室、裂孔ヘルニアがその主たるもの様である。特に学問的には、先に述べたように食道アカラシアに於て、又、食道静脈瘤に於て、研究の跡の著しいものを本学会から見出すことができる。

まず、食道アカラシアに関しては初め本症の外科的治療として Heller 法、Wendel 法、Girald 法、Petrovsky 法等の数多くの術式があったが、この方面の外科的治療の検討は、ほぼ終了した感

がある。最近では、胃弁移植法（千葉大二外）、fundic patch 法（岩手医大旗福）等の新術式の発表もあり、更に、本疾患の発生機序、病型の分類と術式適応という具合に将来益々この分野の研究が進んでいくと思われる。

食道静脈瘤についてみると、この疾患の外科的治療としては、初めシャント手術がその大勢を占めていたが、最近では、直達手術の方が多く行われている様であるが、相手が門脈圧亢進症で、その原因も多岐に渉る事であるから、今後、術式と適応に関する基準などを、誰にでもわかる様に、明確にして行きたいものである。

本学会と食道良性疾患について、過去と現在について、又将来の事にも若干の期待を申し述べたが、食道疾患に携わる者にとって、最大の関心事は胸部食道癌の治療であり、遠隔成績の問題、或いは合併療法について、リンパ節廓清、食道再建等、どの問題も解決したとはいえない。幸い、食道良性疾患については、多くの場合、治療成績は改善をみており、学問的な裏付けも多くなされているが、尚、その的確な診断と、誰にでも納得でき、且、安全、容易な手術法の確立は是非共必要であり、決して等閑にしてはいけな、と痛感する次第である。
